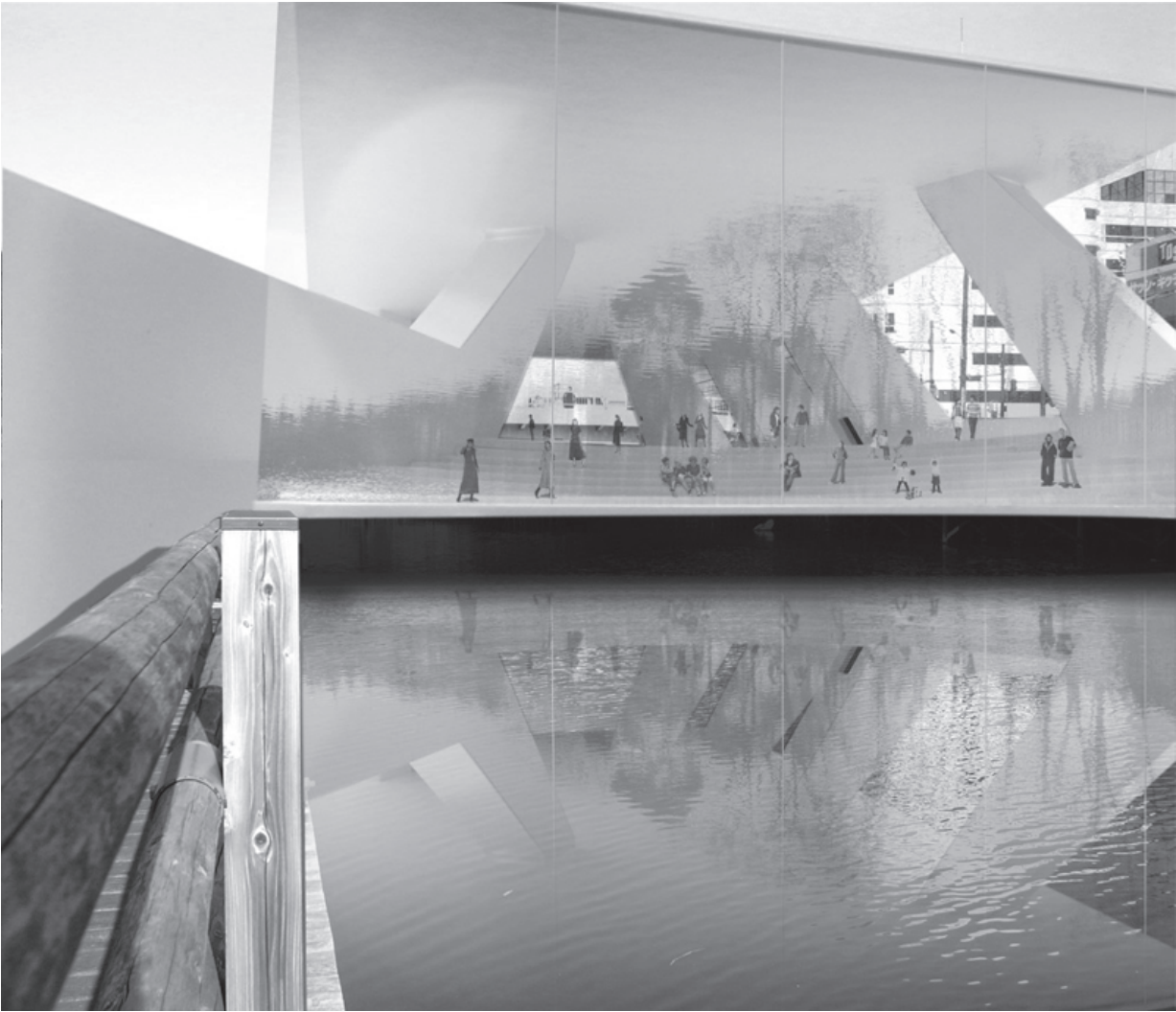


名前の無い場所へ続く道



Kobayashi Hiroaki
小林 啓明

空間・機能ともに都市の裏になってしまった運河の上に、機能から切り離された「名前の無い場所」を置いてみる。行為のきっかけとなる空間と、それをを行う場所に分けることで、名前の無い場所は、ある人にとっては図書館になるし、ある人にとってはコンサートホールになったりする。つまり、機能を取り除かれた形態は、あらゆる行為を受け入れる「名前の無い場所」となるのではないかと考えた。名前の無い場所を都市に点在させていくことで、部分から全体へと新たに都市を更新していく。

